

Ⅱ. 報告

米国の大学進学独立カウンセラー協会の年次会合HECA Conference 2018 への 参加報告とそれにもとづく米国大学入学者選抜についてのいくつかの検討

2018.6.11-15 テキサス州ダラス

高大接続研究センター長 大谷 尚

2018年6月11日から15日まで、テキサス州ダラスで開催された、大学進学のための独立カウンセラーの協会・団体であるHECA (Higher Education Consultants Association) の2018年の年次会合 (カンファレンス) に参加し、この独立カウンセラーと米国の大学進学について種々の情報収集を行ったので報告する。また、このカンファレンスの報告だけでなく、それぞれのトピックに関連して、独立カウンセラーや米国大学進学制度について紹介する。したがって、以下は、必ずしもプログラムの進行に沿った形で論述しているわけではない。

1. 大学進学独立カウンセラーについて

米国の高校生の大学進学は、一般に大学側のアドミッション・オフィサーまたはアドミッション・カウンセラーと呼ばれる人たちと、高校側のカレッジ・カウンセラーとが協議、協同して行われる。しかし大学側にも高校側にも属さず、独立して、高校生のための大学選択や大学進学の支援を仕事とするインデペンデント・カレッジ・カウンセラーと呼ばれる人たちがいる。この人たちは独立して、家庭からの依頼で契約をし、高校生の大学選択や大学出願をサポートする個人事業主である。本稿では、この人達を以下「独立カウンセラー」と呼ぶことにする。今回参加したHECAは、その独立カウンセラーたちのための全米をカバーする協会・団体である。

この人達については、当センター主催で2018. 2. 3に開催した公開講演会「高大を接続する－高校と大学の教師の役割－」での、筆者による講演「高校と大学とが対話的・協動的に実施する北米の大学入学者選抜－アドミッションオフィサーとカレッジカウンセラーの職務の調査を通して－」でも触れており、講演の映像は当センターWEBサイトから配信され¹、その逐語記録とその時のスライドが、本報告書のpp3-30に掲載されている。また、この講演では、米国の大学進学の仕組みやアドミッション・オフィサーとカレッジ・カウンセラーの職務についても紹介している。それらに対する理解は、この独立カウンセラーの職務の背景として重要であるので、ぜひまずそちらを読んで頂きたい。しかし読者の便宜のため、独立カウンセラーについて、上記の内容と一部重複するが、最初にここで少しだけ簡単な解説を記しておく。

かれらのWEBページなどの情報発信によると、独立カウンセラーの多くは過去に大学側のアドミッション・オフィサーか高校側のカレッジ・カウンセラーを経験した女性で²、その多くは

¹ http://chet.educanagoya-u.ac.jp/?page_id=1575

² この会合では、心理カウンセラーをしている人にも会った。

母親である。高校生の家庭³との間で、セッションごとの契約あるいは出願全体のパッケージ契約をする。メリットとしては、高校のカレッジ・カウンセラーが1年に何百人もの生徒の面倒を見るのに対して、独立カウンセラーは1年に数人の生徒だけの面倒を見るので、きめ細かく対応できることが上げられている。つまり家庭教師のように機能する。得意分野があって、音楽や美術などの進学には、より多くの情報提供ができる人がいる。また、大学選択と出願に伴う親子の間の緊張・対立関係の間に緩衝材のように入って、それを和らげる働きもしている。ただし、「大学とのコネを使って仕事をするものではない」と明言している。たとえその人が以前に大学のアドミッション・オフィサーであっても、その大学とのコネを使うことはなく、そのような期待には意味がないとしている。また、「出願の際の小論文エッセイを生徒に代わって書いたりはしない」とも宣言している。それは非倫理的であるし、大学側のアドミッション・カウンセラーはSATの記述式テストの結果をダウンロードして、出願時の小論文と突き合わせるのも、そのようなことをすればすぐに、大人の手が入ったと分かってしまうと述べている。中には、特別に成果を上げて高収入を得、高級車に乗っている人もいることを否定していないが、ほとんどは、少ない収入で、むしろ生徒のために働き、しかるべき生活をしている人たちであるとしている。また、独立カウンセラーの選択と契約に際しては、上記のNACACのような会合に参加するなどして研修し、常に専門的発達に務めているかどうかを1つの基準として考えるべきだとしている。実際、上記のNACACの参加者の20%は独立カウンセラーであった。

このような独立カウンセラーは専門職団体を形成しており、その1つがこのHECAである⁴。この団体は毎年年会を開催し、情報交換、情報共有、専門職的発達に努めている。HECAのページによれば、HECAは当初38人で始まったが、現在は1,000人の会員を擁し、毎年23,000人の高校生の支援をしているとしている。

以下、前半では、筆者の参加したセッションについて解説する。またそれを通して、米国の入学者選抜の日本との違いについての考察する。その後は、独立カウンセラーを巡るいくつかの事項について紹介する。

2. 今回のカンファレンス

(1) 今回のカンファレンスのニックネーム

HECAは毎回の大会に大会のニックネームのようなもの付けている。この年は“Deep in the Heart of HECA”であった。これは、アメリカの1941年のポピュラーソング“Deep in the Heart of Texas”のもじりである。この曲は軽快で明るく、テキサスの農場の風景を描き、恋人を思い出すという内容の、ウェスタン調の古き愛すべき歌で、テキサス州ダラスで開催することから、このタイトルになったものと考えられる⁵。いずれにせよ、こういうニックネームからも、大会

³ 後述するが独立カウンセラーは、中学生（9年生）から面倒を見る場合もあるとのことだった。

⁴ これらの参加する専門職団体としてもう1つ、IECA(Independent Educational Counselors Association)があるが、そちらは、大学入学のためのカウンセリングだけでなく、問題のある生徒の家庭教師や心理カウンセラーのような人々も含まれるとのことである。

⁵ 2019年度は、6/17-6/21 にロードアイランド州プロビデンスで開催され、そのタイトルは、“Discover New England, Discover HECA”である。“Discover New England”はNew England 5州（コネチカット州、メイン州、マサチューセッツ州、ニューハンプシャー州、ロードアイランド州）の観光振興のNPOの名称でもありそのNPOの略称はDNEである。

を開催地の特性を出したものにするとともに、親しみやすいものにしたいという実行委員会の意図が理解できる。

(2) 日程と会場

全日程は次の通りである。初めに概観すると、実質的な内容は12日早朝から13日夕方までの2日間であり、全体の前後に、周辺の大学等へのオプション・ツアーがある。また、10日と11日には協会の各種委員会等が設定されている。ただし11日の夕方に、新規参加者オリエンテーションと全体の歓迎レセプションが設定されている。つまり一般参加者は、12日早朝からの会に備えて、11日のうちに会場のホテルに入ると想定されている。なお、会場のRenaissance Dallas Addisonホテルは、近くに観光サイトの全くない、主にカンファレンス用と考えられるホテルであって、ダラスフォートワース空港とダラスダウンタウンとは、お互いに正三角形の頂点のような位置関係にあり、下記のような早朝から夜までの稠密なプログラムのためもある、会期中にダウンタウンを訪問することは、現実的にまず不可能である。

6/10 (日)

12:00-17:00 プレカンファレンス研修プログラム
14:00-18:00 委員会
17:00-20:00 参加登録手続き

6/11 (月)

全 日 プレカンファレンス・ツアー (申し込んだ参加者のみ)
6:50- 8:00 参加登録手続き
8:00-17:00 プレカンファレンス・研修プログラム
8:00-16:00 各種委員会
15:00-17:00 2日間展示する展示者の展示設置
15:00-19:00 参加登録手続き
17:00-18:00 新規参加者オリエンテーション
18:00-19:30 歓迎レセプション

6/12 (火)

6:45-16:00 参加登録手続き
6:45- 7:45 朝食
7:30- 8:45 開会行事
8:30-17:00 展示者による展示
9:00-10:15 各種分科会セッションA
10:30-11:45 各種分科会セッションB
12:00-13:45 昼食と基調講演
14:00-15:15 各種分科会セッションC

16:00-18:30 カレッジフェア（多数の大学による自大学紹介の機会）

6/13（水）

7:00- 8:00 参加登録手続き
6:30- 7:45 朝食
7:30-15:30 展示
8:00- 9:15 各種分科会セッションD
9:30-10:45 各種分科会セッションE
11:00-12:15 各種分科会セッションF
12:30-14:00 昼食と年次総会
14:15-15:15 各種分科会セッションG
15:30-16:30 各種分科会セッションH
18:15-20:30 サザンメソジスト大学美術館⁶訪問と夕食
21:30- お別れパーティ

6/14（金）

全 日 ポストカンファレンスツアー（申し込んだ参加者のみ）

3. 初参加者（First Timer）のためのオリエンテーション6/11月 17:00-18:00

（1）初参加者への最初の説明

上記のように、メインのセッションの始まる12日の前日の11日の夕方に、初参加者のためのオリエンテーションがあった。そこでは最初に、HECAの倫理綱領Code of conduct について解説があった。倫理綱領についての解説を最初にする点に、独立して仕事をする独立カウンセラーの団体が、会員である個人開業のひとりひとりの独立カウンセラーが、同じ団体に所属する専門職として、その行動面の水準の維持を図ることを、非常に重要視していることが現れていると感じた。続いて主に、HECAの会員になることで得られる恩恵と会員相互のネットワークについて説明があった。

このオリエンテーションは、シンディ・マクドナルドという女性によって進められた。シンディは HECA の創立メンバーでカリフォルニア在住、もう一人の進行役のバージニア・ブラックウェルはテキサス州ヒューストンの人であった。シンディは、もう1人のバージニアから、“She is HECA.” と形容されている。後述するが、あとから会員議長（Membership chair）、次期会長（President Elect）、現会長（President）の3名がこのセッションに来て紹介され、挨拶をしたが、その時も、3人はシンディに深い敬意と親愛を示していた。

続いて、独立カウンセラーは、カウンセリングの側面とビジネスの側面の両方をもっているこ

⁶ Meadows Museum. 驚くほど立派な美術館で、スペイン美術のコレクションではスペイン国外で最大を誇り、10世紀から21世紀のスペインの作品を所蔵している。それらには、エル・グレコ、ベラスケス、ゴヤ、ピカソ、ミロ、ジャコメッティ、マリノ・マリニ、などのスペインの作家の作品に加え、ロダン、ヘンリー・ムーア、イサム・ノグチなどの作品が含まれている。

とが説明され、その両方についてさらにいくつかの説明があった。ビジネスの面では、HECAの正規会員になれば、HECAのWEBサイトの会員プロフィールに、専門領域、対象となる生徒の範囲など、いろいろな情報提供を行うことが可能になること、そこに自分の写真も自分の事務所のロゴも出せ⁷、自分のビジネスのサイトへのリンクも掲載できること、それが HECA のサイトの Find a Consultant というページで検索できること。したがって、HECAの正規会員になることは、ビジネスの面でも有益であることなどが説明された。このページには、地区別では、北東部290名、南東部179名、中西部 147名、西部579名、米国外 (Non US Region) 82名、バーチャル(電話やインターネットで指導を行い地域を限定しない者)151名が掲載されていて、地区によって検索することもできる。また、提供できるサービスや対象として想定している生徒のタイプによっても類別されていて、それによっても検索できる。

(2) 個人事業種としての独立カウンセラー

かれらは個人事業主であるため、専門職の団体に会員として認可されており、そのサイトに自分の紹介が掲載され、検索できることは、確かに非常に有益であろうと思われる。たとえば、上記のシンディもバージニアも、HECAのサイトで見ることができる。この2人を例に説明する。上記のカリフォルニアのシンディ・マクドナルドは、McDonald & Associates/ GuidedPathという事業名で、自身を President と称している。提供できるサービスとしては、「大学選択、出願指導、小論文準備、(SATなどの) テスト準備、奨学金等アドバイス、大学院進学アドバイス」が上げられていて、対象となる生徒として、「高校生、編入生、スポーツ選手、美術・芸術専攻への出願、第一世代(その家族で初めて大学に進学する生徒⁸)」としている。また、WACAC (western Association for College Admission Counseling) つまり上記のNACACの西部支部の中心的メンバーであることと、HECAの創業者であることも記されている。

上記のテキサス州ヒューストンのバージニア・ブラックウェルは、College Direction Counseling Services という事業名で、自身を、Independent Educational Consultant と称している。提供できるサービスはシンディとほぼ同じだが、「(SATなどの) テスト準備」が含まれていない。対象となる生徒もシンディとほぼ同じだが、シンディには無い「学習障害やADDの生徒」が含まれている。このように、ひとりひとりの対応する専門や対象が異なっており、かれらを利用する側としては、このサイトで比較することが有益である。

事業名は他に、現在のHECAの役員のもを例として示すと、Advantage College Planning, Cheri Barad Education Consulting, College Bound Guidance, Overman College Consulting, American College Consulting, American College Admissions Consultants, Alma Mater College Admission Consultants, Independent Counselors, Beyond the Applause, LLC, College Options, Rapaport Consulting LLCなどであり、本人の名前を含めたものやそうでないもの、American という非常に大きな形容詞を付けたもの、Counselors という造語によるもの、Beyond the

⁷ それぞれがロゴを持っていることは、筆者が受け取った名刺にそれが印刷されていることから分かる。

⁸ このような生徒は、家族に大学進学経験者が居ないため、出願についての知識を十分に持っておらず、能力があっても、適切な出願には援助が必要である。いっぽう、大学側は、このような生徒を入学させることが、米国社会の流動性を高めることになると考えており、積極的に入学させる姿勢を示している。

Applauseというスローガンのような言葉によるものなど、実に多様である。これらの事業名からも、かれらがビジネスの側面で、いかに努力と工夫をしているかが分かる。

(3) 地域活動

続いて、バージニアから、ヒューストン支部の例について説明があった。ヒューストンでは、年4回集まっている。地域の会員相互のネットワークもある。その支部の会には、大学教員を顧問に招くこともあるし、会員のベストプラクティス（成功事例）の発表などもしている。今年の時点で会員は40名であった。

そもそも独立カウンセラー同士は、いわば競合関係（商売敵（がたき）の関係）にあり、そのような関係を同業者としての「仲間」の関係に変革するべきだと考えて、地域の支部が草の根で始まったものだとのことであった。同じ地域の独立カウンセラー同士は、たしかにこのように、お互いに競争相手competitorであり、良好な関係の上での競争的な関係はお互いを高めるのであるから、これは優れた発想であるといえよう。また、上記のように、専門性や対象とできる生徒が少しずつ異なっているので、自分が対応できない内容や生徒からの相談は、別のカウンセラーを相互に紹介し合うような関係が形成できればそれに越したことはない。しかしながら、競争関係はいつまでも続くのだから、そこでは、同僚性と競合性という相反する特性をうまくマネジメントするという困難な課題を常に抱えるのだと考えられる。

なお、バージニアは、HECAの会員証は自分で印刷することができ、自分は額にいれてオフィスにかざっていると述べていた。また、会員がHECA全体に対して行うカンファレンスや地域での活動は、基本的にボランティアによって動いているとのことであった。

(4) 会長、次期会長、会員議長

この初参加者セッションの途中で、会長（president）キャロリー・グラヴィナ、次期会長（president elect）ブルック・デイリー、会員議長（membership chair）シェリ・バラドの3名が、初参加者に紹介されるために来た。この3人に、フロアの初回参加者の一人から、「どうやったら会長になれるのか？」という質問があって皆笑ったが、このルート、つまり、会員議長、次期会長、会長の順に昇格していくのだと説明された。さらに、「そのような役職に就くにあたっては、その職務内容をどうやって学ぶのか？」という質問に対して、会長が、「会員議長は次期会長に学び。」まで説明したところで、すかさずフロアから、「次期会長は会長に学ぶのか？」と質問され、「会員議長も次期会長も会長に学ぶ」という答えだった。それぞれの任期は2年とのことであった。このような制度について、Very well choreographed.（大変うまく振り付けられている）と言っていた。

4. 歓迎レセプションとそこでの会話

(1) 歓迎レセプションのスポンサー

歓迎レセプションは、テキサス・クリスチャン大学がスポンサーとなっていた。米国のこのようなカンファレンスでは、大学がそのイベントのうちのどれかあるいはいくつかのスポンサーになることは多く、それがスポンサー側の情報提供の機会になるし、独立カウンセラーに好感を提

供することは、自大学の優秀な入学者獲得に肯定的影響があると考えられているのだと思われる。

(2) 元会長との会話

筆者は初参加で知り合いがいなかったが、すぐに元会長のボビーが来てくれた。彼に日本の高大接続改革のことを話し、前年3月のマサチューセッツの4大学のアドミッション部門の調査と9月のボストンでのNACACに参加したことを話した。NACACはボビーも参加したとのこと。ボビーに、独立カウンセラーのバックグラウンドの割合をきいた。

筆者：独立カウンセラーのバックグラウンドは、大学側のアドミッションオフィサーと高校側のカレッジカウンセラーとでは、どちらが多いか？

ボビー：正確な数値は無いが、自分の考えだと65%は高校側からだと思う。

筆者：どちらの経験もない人はいるのか？

ボビー：いる。しかし大学側のアドミッションオフィサーと高校側のカレッジカウンセラーでなくとも、心理カウンセラーなどをやっていた人たちである。その人たちは、大学の入学については、このHECAのプレカンファレンスワークショップなどで学んでいる。

ボビーは、「日本語と中国語ができる女性がいるので紹介したい」と言って探し始めたが、見つからない。「プレカンファレンスワークショップを担当していたので、疲れて部屋で休んでいるのかもしれない。でももし見つかったら紹介する」と言って、去っていった。

ボビーと話しているときに、アドミッション・オフィサーのトレバー（大学名不明）がきた。米国西部地区担当のアドミッションオフィサーで、夏に東京と軽井沢に行ったと言っていた⁹。主にインターナショナルスクールと国際バカロレア校を訪問しており、軽井沢の国際バカロレア校（UWC ISAK JAPAN）を訪問したとのこと。筆者は、附属学校長を併任していたことがあり、その際に、日本で5校だけの国際バカロレアに関する研究費を文科省から受けていて、メルボルンのジロング・グラマースクールも、生徒とともに訪問したことがあると伝えた。それから日本のカナディアン・スクールにも行ったと言ったので、「神戸か？」と聴いたら、「そう、神戸だ」とのことだった。

そのあたりでレセプションのスポンサーのテキサスクリスチャン大学による、動画を使ったプレゼンテーションが始まる。

(3) パトリシアとの会話

その後、ボビーが約束通り日本語のできるパトリシア・オキーフをつれてきた。パトリシアは南カリフォルニア大学職員で、HECAには参加して3年目。南カリフォルニア大学日本オフィスに勤務していて、東京に14年住んでいた。後で安倍首相と撮った写真を見せてくれた。安倍首相は

⁹ 日本を西部地区の一部と見る考え方は他にもある。たとえば、米国の学校の教育課程認定（アクレディテーション）を行う団体は6つあり、担当地区が別れている。その中で最も西を担当するWestern Association of Schools and Collegesの担当地域は、California, Hawaii, American Samoa, Guam, Marshall Islands, Federated States of Micronesia, Northern Marianas Islands, Palau, Tokyoとなっていて、東京を含んでいる。

南カリフォルニア大に留学したことがあり、友達だと言っていた。パトリシアに、日本の高大接続改革のことを話した。日本語は、JLPT Level 1 を有し、中国語は香港中文大学で2年学んだ。UCLA卒、南カリフォルニア大のMBAを有している。

パトリシアには、次の質問をした。

筆者：ボビーから聞くところでは、独立カウンセラーは高校側のカレッジ・カウンセラーだった人が多いとのことだが、一般論として、高校側のカウンセラーをやめてこの仕事をするのは、定職、定収入を失うので、チャレンジングなことではないのか？

パトリシア：だから、最初は土日だけこの仕事をするなどして、定職を辞めないようにしておき、徐々に独立する。ボビーのようになると、保護者達の間で有名になり、相談したい人がたくさん出てくる。

パトリシアは、「日本人はアメリカの大学に来なくなった。その理由は、以前は、東大や名古屋大や慶応に入れなければアメリカの大学に来たが、今は子どもの数が減ったので、それらの大学に入りやすくなったからだ」と言っていた。しかし、以前は日本の有名大学に入れれば入ったが、入れなければアメリカの大学に留学したという話はあまり聞いたことがない。第一、日本の選抜性の高い大学に入れないようなら、アメリカの大学で英語の授業について行くのは容易なことではない。それで、大谷がそれを聞いて怪訝な顔を見せてしまったためか、「それについてどう思うか？」と聞かれたので、「それは1つの解釈として成立するかもしれないが、そういうことはあまり聞いたことがない」と言って、少子化と「内向き」などの現状を説明した。

日本から学生が来なくなったので、南カリフォルニア大学は東京事務所を閉めてしまい、パトリシアは現在は上海に住んでいて、中国の生徒の保護者に働きかけているとのこと。

筆者は「上海は国際バカロレアの調査で附属学校の生徒を連れていった。上海には国際バカロレア校もあるし国際バカロレア校以外でも、卒業生をアメリカに留学させようとする高校がどんどん増えているのを知っている」と伝えた。「Turning the Tide¹⁰ について調べたら、日本にはページが2つしかなく、一方は他方を参照していたので、ソースは1つしかなかったと言えるが、中国ではこれに触れているページがじつにたくさんあり、そのことから、中国の生徒がアメリカの大学を志望していることがわかる」と伝えた。するとパトリシアは、「中国の生徒にあは、とにかくハーバードに行きたい子が多く、Turning the Tide はハーバードで始まったから、特に関心があるのだろう」とのことだった。

それから、中国での独立カウンセラーの活動のことをたずねると、「中国では個人より会社と契約を結ぼうとする」とのことだった。

この頃から、筆者がパトリシアに北米の高大接続についていろいろ質問をし、パトリシアは筆者に日本の教育についていろいろ質問するという、質問合戦のような会話になった。

パトリシアからまず、日本の大学を9月新学期にする可能性についてきかれた。これは日本人が

¹⁰ 米国大学の入学者選抜の新しい潮流。上記の2018.2.3の公開講演会の筆者の講演を参照のこと。

米国の大学に入学するためには、重要な点である。それに対して「東大がそうすると言ったが名大はそうしないと宣言し、結局、東大はそれを取り下げた」と話した。「なぜそうしないのか？」と聴かれて、「それには制度的側面と文化的側面とがあると思う。まず制度的には、そもそも会計年度が4月からなので、学年歴だけ9月開始に変えることは制度上も不合理で、現実的には非常に困難だと思う。文化的には、4月開始は1872年の学制以来日本の社会と文化に刷り込まれたことであり、桜の花の下での卒業や入学は、日本の学校の原風景になっている。ひとつには、そのような文化を変えることが困難なのではないかと思う。」と伝えた。

これと前後して、米国のSATが最大6回も受けられるのに対して、日本の入試センター試験はたった1回の同日同時刻受験であることに話が及び、これについてもパトリシアは不思議あるいは不合理に思っているのだと質問されたので、中国と韓国も同じであるから、東アジアの文化的伝統なのではないか、実際、科挙がそのような伝統を持っていた、ということも話した。

(4) 独立カウンセラーの所属するもうひとつの協会・団体IECA

パトリシアはIECA (Independent Educational Consultants Association) のことを話してくれた。独立カウンセラーにとっての協会・団体は、HECA以外にもうひとつIECAがあり、両方の会員になっている人もいるとのこと。IECAの次の会は11月にロスアンジェルズで開催される予定とのことだった¹¹。

そのあたりでローリーがきた。それまでは日本語で話していたが、会話はそこから英語に変わった。ローリーは、ネブラスカ大学附属学校群から来ていて、黒いランヤードの名札を下げていたので展示者としての参加者だと分かった。この学校では、AP (Advanced Placement) プログラムなどたくさんのプログラムを出していて、すべてオンラインなので、全米に受講者がいるとのこと。料金は1クォーターで250ドルとのこと。つまり、APを全国の高校生に提供しており、それを独立カウンセラーに知ってもらうために展示者として参加している¹²。

ローリーを加えてIECAの話になったが、ローリーは、IECAには知識人気取り (snobby) な雰囲気があると言った。それに対して、パトリシアは、HECAが米国西海岸の文化を背景にしているのに対して、IECAは東海岸の文化を背景にしているのだと言った。そして、以下のことを筆者のノートに英語と日本語とで書いてくれた (以下はすべて日本語にする)。

HECA

対象：大学入学の高校生ための独立カウンセラーの協会・団体

文化：米国米国西海岸

¹¹ IECAの年会は春と秋の2回開催されている。2018年は、2/11-14にロングビーチ、11/7-11/9にロスアンジェルズ、2019年は5/8-5/10にシカゴ、11/6-11/8にアトランタ、2020年は春大会が5/13-5/15にコネチカットで開催される予定。

¹² 紙幅の関係で本稿では詳しく触れないが、展示は非常に多くあり、大学、教育関係のNPO、教材開発企業、個人などである。NPOとしては、主に銀行などの経済系企業から資金を集め、学生に経済学の基礎を身に付けるものや、発達障害児の発達のためのプログラムを提供するものなど、実に多様であった。

IECA

対象：中学生、高校生、大学生、セラピューティック・スクール¹³の生徒

プレップスクール¹⁴やボーディングスクール¹⁵、一般の中学、高校、大学入学のための準備も支援する

文化：米国東海岸文化

(5) 独立カウンセラーの顧客としてのホームスクーラー

それからホームスクーラーの話になった。ホームスクーラーは高校に通っていないため、かれらにとってはカレッジカウンセラーがいないので、独立カウンセラーを雇うのではないかと質問した。すると、そうではないとのこと。理由は、「ホームスクーラーには時間がある。また、かれらはネットワークを持っている。そして、かれらはそもそも自立的である。だからすべて自分たちでやっていることが多く、独立カウンセラーにとっては、良い顧客ではない。」とのこと。つまり、ホームスクーラーは、独立カウンセラーの仕事を、自分たち自身でやっているのだと理解できるようである。

5. 2日目朝のラウンドテーブル —重複入学手続きの禁止と米国の大学進学制度—

(1) ラウンドテーブルの進め方と議論の題材

6/12 朝食は 6:45 からである。朝食は9人くらい座れる丸いテーブルがたくさん置かれた部屋でとる。誰がどのテーブルで食べるべきかは決まっていないので、それぞれ好き勝手に座る。そして朝食に引き続き、7:30 には、すぐに最初のセッションが始まる。最初のセッションは「ラウンドテーブル」となっていたが、朝食会場で、たまたま同じ丸テーブルで一緒になった9人ほどの人と、朝食後にそのテーブルのままディスカッションするものである。まさに「ラウンドテーブル」そのものだった。

その際、あらかじめ決められた進行役が各テーブルにひとりずつ来る。もしそのテーブルが満員だったら、誰か1人が別のテーブルに移動して、その席を空けて進行役を座らせる。人数の少ないテーブルの参加者は、他のテーブルに移動して、すべてのテーブルをほぼ9人にしてからセッションが始まる。

テーブルには、進行役がもってきたその際のトピックHeart of HECA Round Table Topics:2018 が置かれる。それを読んでテーブルごとに議論をする。トピックの1と3はそれを読んで具体的に考えるためのPBL (Problem Based Learning) の「シナリオ」のようなもので、2だけは質問である。なお、テーマが1から2、2から3へ進むとき、司会は別のテーブルに移動する。

¹³ セラピューティック・スクールとは、学習面での困難だけや、アルコール中毒やドラッグ中毒、摂食障害などの問題や困難をかかえている生徒を受け入れる学校で、多くは大学進学を志向していないもの。

¹⁴ 有名大学進学を目指す生徒のために高度な教育を行う寄宿制私立中学・高校

¹⁵ 寄宿制学校

ここでのシナリオは日米の大学入学者選抜の違いを際立たせているものであるため、少し詳しく取り上げる。

1. ある母親と娘が、高校のGPA、AP (Advanced Placement) の成績、ACT の得点が示された上で、「この子はA大学とB大学に合格したかったが、結局それはかなわず、C大学とF大学に合格した。保護者は、独立カウンセラーに払った費用について不満を言っている。あなたはこれにどう応えるか？ (大学名はすべて実名である。)
2. あなたのビジネスを育てるために最も重要だった意思決定は何か？
3. トップクラスの高校の3年生がアルコールの供されるパーティに参加し、性的非行で訴えられ、レイプである可能性があった。それはこの生徒が4月の終わりに、倫理規定の厳しい大学に入学金を納めて入学手続きをした直後であった。彼は告発を恐れて身体面でも影響が出ていた。家族は、そのことが入学手続きをした大学に知られると、その大学がその生徒の入学を取り消すのではないかと心配した。その事件は高校の敷地内で起きたことではないので、高校は一切関知せず、この間、警察によって捜査が行われている。母親は、息子のために、合格通知を受け取った第2志望の大学が、非行については一切情報提供を求めないとしているので、その大学にも入学金を払って入学手続きをしておきたいと相談した。このような難しい状況について、あなたはこの家族をどう援助するか？

1は、生徒の成績と合否の予想についての難しさ、また保護者からのクレームへの対応の問題であると考えられる。GPA, AP, ACTの実際の点数と、大学名がすべて示され、現実的に検討する点で、非常に具体的で実践的な課題であると思われる。また、それらの点数は、ちょうどボーダーあたりに設定されていると考えられる。

2は、独立カウンセラーが、これまで述べてきたようなビジネスの側面を有しているため、その側面についての議論である。しかし3は、じつは日本とは異なる重要な問題を含んでいる。それで、以下では、このうち3について取り上げる。

(2) 高校時代の非行は大学入学に影響するか

まず、入学前の非行を合否判定に考慮しないと宣言している大学があることに日本の読者は驚くかもしれないが、これこそが各大学のアドミッション・ポリシーであるため、そのような宣言を有する大学もあり得る。ただし筆者には、現時点でそのようなアドミッションポリシーの存在を確認できていないが、このことに関連して、アドミッションオフィサーがアドミッションに際して、高校生の過去の非行をどう見るかについて、興味深い記事がある。それは、独立カウンセラーのSara Harberson (Harberson, 2015) が、高校生がSNSに生徒が書いている情報が、その子のアドミッションに不利に働くことがあるかどうかについて書いているものである。著者はまず、Kaplan Test Prep Surveyを引用し、調査では、35%のアドミッションオフィサーが生徒のSNSをチェックしているが、生徒の合否に否定的な影響を与えたのは16%だとの結果を紹介している。

その上で、高校時代の非行歴については、高校側のカレッジカウンセラーと生徒自身とで言うことが違っていると、詳細に調査をされて分かってしまうことと、過去のことを隠しておいて大学に合格しても、地域の住民から匿名の連絡が大学に行くこともあること¹⁶を述べている。そして、「生徒の過去の非行について、絶対に見逃さない大学というのもほんの一握りほど存在するであろうが、ほとんどの大学は生徒にセカンドチャンスをくれるのだから、最初から正直になることこそが、取るべき道である」と述べている。これに即して考えると、上記3の、すでに入学手続きをした大学が「生徒の過去の非行について、絶対に見逃さない大学」かもしれないと思われるのだろうし、これに加えて入学手続きをしようとしている大学が、「生徒にセカンドチャンスをくれる」大学だと思われるのだと考えることができる。

(3) 複数の大学に入学手続きをすることができるか

次に、2つの大学に入学手続きをすることについてである。読者の多くは、この相談を、この生徒の事件が1番目の大学で問題にされる可能性についての相談なのだと理解するだろう。つまり、もし、1番目の大学でこれが問題にならないなら、2番目の大学に払う入学金は無駄になるので、そう考えられるなら2番目の入学手続きをしないでおき、1番目の大学で問題にされて入学を取り消される可能性があるなら、2番目にも入学手続きをする必要がある。だから、このケースでは、独立カウンセラーは、そのどちらになるかを相談されているのだと思うかもしれない。しかし、じつはそれだけではなく、この相談には、もっと深刻な問題が含まれているのである。なぜなら、日本とは違って、米国では複数の大学に入学手続きをすることは認められていないからである。現実には、入学手続きについて、大学を超えて相互にチェックする仕組みは存在しないので、生徒とその保護者は、複数の大学に入学手続きをすることが物理的には可能である。しかしそれは、してはならない不正な行為とされており倫理的には大きな問題である。日本では、合否の分かる期日の後になる第一志望の大学に入学したくても、合格が早く分かった第二志望以下の大学に入学金を収めて入学手続きをしておき（いわゆる滑り止め）、第一志望の大学に合格すれば、それより下の志望の大学に収めた入学金を諦めれば良い（捨てれば良い）だけで、複数の大学に入学手続きをすることは全く問題にならない。また、私立大学にとって、入学辞退者の入学金収入は受験料収入とともに重要な財源である。しかしそのような日本とは、米国は完全に違っている。したがってこの相談は、「そのような不正な二重合格手続きをせざるを得ないと思うがどうか？」という、より深刻な相談でもあるのである。

このように、これについては、日本の入学手続きと異なり、それが社会正義や倫理に関わるがゆえに、今日の日本の高大接続について考える上でも重要だと考える。そのためここで少しそれについて述べる。

(4) 入学手続きの期日

まず、米国の入学手続きは、5/1までに行わなければならない。これはNACACの倫理綱領

¹⁶ その非行の被害者となった人物が投書する以外に、その大学の卒業生などが、自分の大学にそのような生徒が入学していることが容認できず、投書するのであろうか。

Statement of Principles of Good Practice: NACAC's Code of Ethics and Professional Practices¹⁷に規定されている。これを“National Candidates Reply Date”と呼んでいる。(日本では、私立大学については決まりはないが、国立大学については文科省が定めている。)

これは米国の大学に1年から入学する全ての生徒 first-year applicants に適用される。これは米国内のすべての大学に適用されるだけでなく、米国外にa primary location を有する高等教育機関であっても、米国内のキャンパスに1年生が入学する場合には、その学生たちにはこれを適用する。また、米国内にa primary location を有する高等教育機関は、米国外のすべてのキャンパスへの入学者についてもこれを適用する。

5/1より前に admission つまり合格通知を提供された者は、「5/1」または「合格通知を受けてから48時間」の、遅い方までにそれを受諾するかどうかを表明しなければならない。

(5) 補欠合格の入学手続き

補欠はその可否を8/1までに大学が決定する。補欠になった生徒には、その学生の関心、奨学金等の必要、口頭による約束を聞くことができる。つまり文書で入学手続きをするという確約を得てはいけないということである。また、補欠者からは入学金やそのほかの料金を取ってはいけない。補欠者にはその大学への関心をきくことができるが、志望順位を聞いてはいけない。他の大学の選択について聞いてはいけない。

5/1以降に合格通知を提供された補欠者は、48時間以内に回答し、入学金の期限は大学が設定する。その前に、大学はその生徒に、入学後の寮の入居の可否について知らせなければならないし、奨学金希望の学生には、奨学金申請パッケージが大学から届いていなければならない¹⁸。

(6) 重複入学手続きの問題

複数の大学に入学手続きをすることの問題についても明記されている。

まず、そういう出願が続けば、大学は入学してくる学生の人数を予測することができなくなり、補欠を増やすか、入学金を高くしなければならなくなる。そうなれば、どちらも将来の出願者に否定的に影響するとしている。また、これは他の出願者にとってもアンフェアであり、重複入学手続きをすると、本来であれば入学できたはずの出願者が補欠に回されたり拒絶されたりすることになるとしている。そのため、大学側も高校側も、生徒に対して、

- ・第一志望校が補欠になってそれ以外からも合格通知を受けた場合以外は¹⁹、2校以上に入学手続きをしないこと。
- ・重複入学手続きが発見されれば合格取り消しをする場合があること。

¹⁷ https://www.nacacnet.org/globalassets/documents/advocacy-and-ethics/statement-of-principles-of-good-practice/2017_spgp_cepp_final.pdf

¹⁸ なお、スポーツで奨学院を得て入学する運動選手Student-athletesは、NACACのこの規定ではなく、National Collegiate Athletic Association (NCAA), the National Association of Intercollegiate Athletics (NAIA), and the National Junior College Athletic Association (NJCAA) 等の規定に従う。

¹⁹ 一方が補欠合格の時だけ、両方の大学に入学手続きをすることは、唯一、非倫理的ではないとNACACは認めている。

を伝えるようにと明記されている。

そして以上を理解した上で2校以上に入学手続きをすることは、カレッジボードの倫理綱領に、「二重に入学手続きをすることは非倫理的だ」と、はっきり書かれている。

このように、米国では、複数の大学に入学手続きをすることができない。そしてその理由は単純であり、第一に、それは相手を騙していることになるからであり、第2に、大学入学者選抜制度の根幹を揺るがすことになるからである。

(7) 非倫理的にも関わらず重複入学手続きをしようとする理由

なお、さきほどのラウンドテーブルのシナリオのようなケースを除いて、どういう場合に重複入学手続きをしようとするのかだが、「2校以上に入学手続きをすれば、少なくとも1校分の入学金を失うのに、なぜこれをする生徒がいるか」も書かれている。筆者は、こういうことを取って明記しているのが米国らしいと感じる。日本だったら、こういうことを書くと、それを読んで、「そうか、そういうメリットがあるなら二重手続きをしよう」と考えてしまう人がいるのではないかと考えて、こういうことを隠しておく。いわば、「寝た子を起こさないポリシー」を取る。しかし実際には、大学側がそれを書かなくても、多くの人は知っているのだし、非倫理的なやり方を知らなかったからそれを採用しなかったのではなく、すべてについて知った上で主体的に倫理的な行動を取ることを求めているのだから、それも明記するのだと考えることができるのではないか。

そのメリットだが、それは、「2つの大学に入学手続きをすることで、5月1日から9月の入学まで、最終決定を引き延したと考える人がいるからだ」としている。たとえば、奨学金などについて5月1日以降に複数の大学と個別に交渉し（もちろん他の大学にも入学手続きをしたことを伝えないで）、奨学金を得られることになった方に入学しようとするためであるとしている。

これがなぜ非倫理的であるかについても書かれていて、まず、It's deceitful. だと書かれている。つまり、それは「騙すことになるから」である。そして学生は1つの大学にしか入学できないのだから、「複数の入学手続きをすることは嘘をついていることになるso they are essentially lying」とはっきりと書かれている。このことには注目すべきであると思う。

このことはたとえば、学生が就職活動で複数の企業から内定を受け取ることにしても同様だと考えることができる。もう何十年か前に、日本の私立大学の外国人教員が、学生が複数内定を受けていることはおかしいと、新聞の投書欄だったかで主張した。このときはたしか、ほとんどの人がこれに耳をかさず、何も起こらなかった。それは日本の就職活動や採用の慣行であって、特段、問題にすべきこととは誰も思っていなかったものと思われる。しかし複数の相手に、入学あるいは入社するという返事をして、その複数の可能性を確保しておいて、後でその内の1つを選んで、他を断ってしまうことをしてはいけないというのは、「騙すこと」になり、「嘘をついていること」になる。これをしてはならないというのは、米国あるいは欧米の文化に共通しているのであろう。筆者は今回、このことに触れて、当時、その外国人教員が主張したことの背景を、改めて知ることとなった²⁰。

筆者が知っているケースだが、アメリカで暮らしていた若者が日本に帰ってきて、あめをくれるという人に、要らないと行ったら、日本でできた友達が「そういうときはもらっておいて、いらないならその人が見ていないところで捨てればいい」と言った。しかしこれはそのアメリカで暮らしていた若者には理解できなかった。それは餓が無駄になるからでもあるが、やはりそれは、基本的に嘘をつくことになるからなのだろうと思われる。

(8) 日本ではなぜ重複入学手続きが当たり前になっているのか

ではなぜ、米国ではこのように厳に禁止されていることが、日本では許されているのだろうか。このことは、日本の大学入学者選抜制度とその文化を再検討する上で重要な観点となるため、少し取り上げたい。筆者はここで、3つの理由を挙げたい。

① 入学しない大学への信義は問われないという考え方

1つは、日本では、接続されるべき2つの段階の間（これを「高校と大学の間」と書かないのは、後述のように大学と就職先の企業との間でも同様のことが言えるのではないかと考えるためである）では、入らなかった組織・機関に対する信義は求められないと考えられているのではないか。たとえば、推薦入試で合格したら必ず入学しなければならないとする場合に、合格者がその約束を破って別の大学に入学しないようにするための「しぼり」は、その入学しない大学に対する真義によってではなく、卒業する学校に迷惑をかけ、それが次年度以降の推薦合格の可能性を閉ざしてしまうことになるということではないか。言い換えれば、お世話になったところには信義を尽くしても、お世話にならないところになら、嘘をついても良いという考え方なのではないだろうか²¹。

② 出願者にとって相手の顔が見えない出願と合格

2つめは、米国のように出願者がアドミッションカウンセラーに会う制度とは異なり、日本では、出願者は大学側の担当者に会わず、顔が見えないので、「誰を騙しているのか」が分からず、「誰かを騙している」という気持ちがしないためではないだろうか。最近では鉄道の乗車が、切符ではなくカードで行われるようになったためにほとんど行われていないと思われるが、以前の「キセル乗車」などは、通常なら人を欺かないような多くの人もやっていた。それは相手が鉄道会社であって、人だという気持ちがしない、つまり人格が感じられないからではないかと思われるが、日本の大学入試も、相手が人として見えるわけではないので、騙しているという感覚がないのではないか。

③ 大学が出願者を選ぶのではなく出願者が大学を選ぶのだという考え方

それから、これは上の②とも関わると思うが、いったん合格さえすれば、大学を選ぶ権利は出

²⁰ このことは、結婚を考えてみれば日本人にも明かであろう。1人の人間が2人以上と結婚の約束をしておいて、時間をかけてそのうちの1人を選ぶというのは、日本でも間違いなく非倫理的だと見なされるだろう。

²¹ 医学部の奨学金の授与される地域枠の卒業生が、奨学金を返還して地域勤務義務の免除を受けることが問題になっているが、この問題にも同様な本質があるように思われる。

願者、入学者の方にあり、大学が出願者を選ぶわけではないという考え方もあるかもしれない。

これらについては、情報が不足しているし、文化論や倫理観についての関連する文献を参照したわけではないため、推測のようなことしか書けないが、これは日米の大学入学者選抜の文化の根幹に存在する違いであり、今後さらに検討していく必要があると考えている。

(9) 米国のアドミッション部門が他大学にも合格した出願者に奨学金を出して自大学への入学手続きを勧める際の他大学の合格の確認

これは、今回の独立カウンセラーとは関係がないが、これまで論じてきたことと関わりがあるので、ここに記しておきたい。

映画「アドミッション」は、プリンストン大学のアドミッションオフィスを舞台にしたものだが、最後の方のシーンで、プリンストン大学のアドミッションオフィサーが出願者の家庭に電話して合格を伝えると、その保護者が、エール大学にも合格したと言ったため、「では、プリンストンは奨学金を検討します」と伝えるシーンがある。

筆者は、まず、奨学金はこのように後から決まることもあるのかと思った。そして、このような場合、プリンストンのアドミッションオフィサーは、その生徒に、エール大学の合格通知を見せてもらうのかどうかを知りたかった。今回、大学のアドミッションオフィサーも参加しており、彼もその映画を観たとのことであったため²²、このことについて聞いてみた。

すると彼は、このように後から奨学金を申し出るとはしばしばあると答えた。それで、この場合、Yale の合格通知を見せてもらうのかと聞くと、見せてもらわないとのことだった。かれは、「だから、この出願者がプリンストンを騙すこともできなくはない。しかし合格通知を見せてくれと要求することは失礼だからしないのだ」とのことだった。

このように、証拠書類の提出を求めないで次のステップに進むということは、日本ではあり得ないだろう。しかし考えてみれば、米国のトップクラスの大学では、学業成績だけでなく、1人1人の出願者の人格も評価して合格を出す。つまり、自分たちが合格を出した出願者は、その人格が優れていると自分たちが判断した出願者なのであるから、その出願者やその保護者を疑うのは矛盾している。

このように、米国の入学者選抜と入学手続きで一貫して原理となっており、その実現が期待されているのは、「公正と信義 (justice and faith) ²³」なのではないのか。これが筆者の抱いたイメージである。

6. 出願の際の手段に関するセッション

出願の際に仕様する出願システムについてのセッションもあった。これは重要であるのでこれについても短く触れておく。

現在、大学間で共通に使われている出願システムとしてCommon Application やCoalition Application がある。これらはたとえば、エッセイで太字や下線が使えるかも違い、書体による

²² アドミッションオフィサーで、あの映画を観ない者はいないと言っていた。

²³ これは正に日本国憲法の前文にあることばである。

強調を利用できるかどうかが違うので、この違いは重要である。また、エッセイに絵や写真や動画を貼り付けて良いとしている大学があるが、それらが貼り付けられるかどうか出願システムによって異なる。絵を貼り付けた具体例として、宇宙工学を専攻したいと言ってその大学を志望した子が、幼い時から宇宙に関心があり、自分になりたかったために幼い時に描いた宇宙飛行士の絵を付けてエッセイを提出した例などが紹介されていた。また、写真を貼り付けた例として、道路の整備のボランティアをしたときの写真を貼り付けた例が紹介された。

なお、Coalition Application を採用する大学は、以前は全体の 20% だったが、現在は50%が採用しており、増えているとの紹介があった。

なおこのセッションは比較的広い会場で行われたが、すぐにいっぱいになり、椅子が足りなくなって別会場から椅子を移動した。このような具体的内容が、独立カウンセラーにとっていかに重要であるかを示していると言えよう。

7. 独立カウンセラーに関するその他のこと

以下に、独立カウンセラーに関するその他のことがらをまとめておく。これらの一部は参加者に質問した答えであり、また、筆者が調べたことも含まれている。

(1) クライアントの人数と料金はどれくらいか？

ある独立カウンセラーにクライアントの人数と料金についてたずねた。彼女は、常時 25人くらいの生徒を抱えていて、2つのパッケージがあると言う。

1番目は、10年生の第2セメスターから始めて入学手続きまで、1年に4回のセッションで、4,500ドルである。もう1つは、最初の面談とその後の10時間の面談で1,900ドルである。なお、メールなどで国外のクライアントがいる場合もある。なお、彼女は、もし1月にクライアントの人数の空きがあれば、定員まで11年生を抱えることになると話した。

このような独立カウンセラーは、裕福な家庭でなければ雇えないと考えられるだろう。しかし独立カウンセラーの料金は家庭の収入に応じてスライドすることがあるし、HECAのページでも、会員は、NPOや高校に対してボランティアワークをすることがあり、pro bono 活動（弁護士などの専門職が無償で社会のために働くこと）もしていると示している（Smith (2014) は博士論文であるが、その1章を割いて独立カウンセラーのpro bono 活動について取り上げている。）。

(2) 複数の独立カウンセラーを雇う人はいるか？

複数の独立カウンセラーを雇う人はいない。しかし高校のカレッジカウンセラーと有料の独立カウンセラーの両方に相談する人はいる。

(3) 遠隔のクライアントはあるか？

国内でもあるし国外のクライアントでもある。国によってSkypeが使えないのでZOOMを使う。What'sUp も良い。その家庭を訪問することができないが、生徒がスマホやタブレットを持って家中を見せてくれることもある。ときどき、裏庭まで見せてくれ、家から離れてしまってwifiが切れることさえある。

(4) クライアントの最少年齢は何歳か？

最少は9歳くらいであり、普通は大学選択プロセスの始まりから。

(5) 大学進学のために有利となる部活や社会活動についてアドバイスすることもあるか。

ある。

(6) 生徒の家庭を訪問するか、オフィスで会うだけか？

家庭も訪問するしオフィスでも会うとのことだった。

(7) 独立カウンセラーの業務形態は変わってきているか？

以前は個人営業が多かったが、現在はフライチャイズ化する傾向があるとのこと。自分の生活を持ったままフランチャイズに入ることもある。

(8) カウンセラーがクライアントに、あなたのSATスコアはいくつだったか？と聞かれることはあるか？

聞かれることはない。SATのスコアは時代によっても違うし、スコアは気にしていない。ただ、独立カウンセラーがどの大学を卒業しているかはクライアントは問題にする。

(9) 志望する大学に入学できたことで成功報酬のようなものももらうこともあるか？

もらったとしても、卒業記念のギフト程度で、入学した大学のロゴの入った、スーツケースにつけるトラベルタグ程度のものとのこと。

(10) このような業務を専門に勉強する課程はあるか？

大学の学部や修士の正規プログラムとしてはたとえばシカゴの Roosevelt University が、MASTER'S IN COLLEGE COUNSELING AND STUDENT AFFAIRS (MA) というプログラムを出している。同様な修士プログラムは他にもあり、遠隔で受講できるものもある。これらは高校のカレッジカウンセラーや独立カウンセラーのためのものであると考えられる。

また、正規課程ではなく、エクステンションの課程もある。たとえば、UCLA Extension には、College Counseling のプログラムがある。このプログラムは実習を含み、成績によって資格が与えられる。

また、大学以外では、The Academy for College Admission Counselingのような組織が、同様なプログラムを提供している。

8. おわりに

以上、まだまだいくつも報告すべき情報を取得した。たとえば大学に提出するエッセイの専門家によるセッションがあった。それはエッセイをどう書かせるかではなく、それぞれがどのような自分の立場を確立してエッセイの指導をすべきかという、メタ的で興味深いセッションであっ

た。

またたとえば、大学のアドミッションカウンセラーによるセッションで、大学は奨学金をどの予算から出しているかというような大変興味深いものもあった。これは直接に、独立カウンセラーがクライアントにアドバイスすることではないが、独立カウンセラーが大学のシステムを知って、大学についてより包括的な知識を得るために有効である。紙幅の関係もあり、これらのその他の情報について、また機会を改めて報告したいと考えている。

文献

Kaplan Test Prep Survey: Percentage of College Admissions Officers Who Visit Applicants' Social Networking Pages Continues to Grow — But Most Students Shrug

<https://www.kaptest.com/blog/press/2014/11/20/kaplan-test-prep-survey-percentage-of-college-admissions-officers-who-visit-applicants-social-networking-pages-continues-to-grow-but-most-students-shrug/>

Sara Harberson (2015) Can your social media profiles affect your college acceptance?

<https://www.saraharberson.com/blog/can-your-social-media-profiles-affect-your-college-acceptance>

Jill M. Smith (2014) The Role of Independent Educational Consultants in the College Application Process

A Dissertation Presented to The Faculty of the Graduate School of Arts and Sciences Brandeis University, Department of Sociology. In Partial Fulfillment of the Requirements for the Degree Doctor of Philosophy